

# 多義語の意味分析の方法に関する覚え書き： 動詞「さす」の分析を事例に

高尾 享 幸

## 1. イントロダクション<sup>(1)</sup>

動詞はしばしば著しい多義性を示し、直観的にはそれぞれのサブ・ミーニングは互いに意味的な関連を有しているように思われる。しかし、明示的な意味分析においてどのようにサブ・ミーニングを区別するかについては必ずしも方法論的に明確でない。また、サブ・ミーニング間の意味的な関連がどのようなものであるのかは直観的に自明ではない。本論では日本語動詞「さす」の多義性について考察し、各サブ・ミーニングの意味分析を試みる。その中で、サブ・ミーニングを細かく分析しながら、それぞれのサブ・ミーニング間の意味的な関連について考察する。

## 2. サブ・ミーニングの区別

ここでは、動詞のサブ・ミーニングを区別する基準として動詞の補部構造に着目する。動詞（あるいは、他の述語）は特定の補部を伴って文の中に生起する。補部は動詞に対して一組の意味関係を持つ句であり、その意味関係は各動詞ごとに指定されている。補部構造が異なることを異なるサブ・ミーニングを区別する基準とすることは、動詞の補部構造は動詞の内在的意味によって決定されるという、現在広く認められている立場に基づいている（Pinker 1989, Van Valin 1993, Levin & Rappaport Hovav 1995, Davis & Koenig 2000）。例として次の二つの文を考えてみよう。それらは同じ動詞を主動詞としながら、その補部構造は異なっている。

- (2) a. ドン・キホーテがサボテンに槍をさした。  
b. 朝日が部屋の中にさした。

(2) a では「ドン・キホーテ」が動作主、「サボテン」が着点、「槍」が移動物を表している。

(2)bでは「朝日」が移動物、「部屋の中」が着点を表している。このように、(2)aと(2)bの「さす」は異なる補部構造をもっており、したがって、異なる意味をもつとされる。

しかし、サブ・ミーニングの区別は単一の補部構造の異同によってのみなされるべきでないと思われる。次の文を見てみよう。

(3) 太郎は右眼に目薬をさした。

この文は動作主（「太郎」）、着点（「右眼」）、移動物（「目薬」）という補部をもっている。すなわち、(3)の「さす」は(2)aの「さす」と同じ補部構造をとる。したがって、上の基準だけからすると、これらの「さす」は同じ意味であって、二つの違ったサブ・ミーニングを持っているとはされない。しかし、(2)aの「さす」と(3)の「さす」は補部構造に関して違った振る舞いを見せる。(2)aの「さす」が別の補部構造への交替が可能であるのに対して、(3)の「さす」にはそれができない。

(4)a. ドン・キホーテは槍でサボテンをさした。

b. \*太郎は目薬で右眼をさした。<sup>(2)</sup>

一般に、動詞の補部構造の交替の可否は動詞の意味にもとづいて定められると言われている（Pinker 1989, Croft 1991, Langacker 1992）。そうすると、(2)aの「さす」と(3)の「さす」は〈動作主、移動体、着点〉という同じ項を持っているが、その意味は異なっていることになる。方法論的には、このことは動詞のサブ・ミーニングの区別の基準として単一の補部構造だけでなく、交替形も含めた補部構造の集合を考慮するべきであることを示唆している。二つの動詞の用法が、同じ項をもち、その項の統語的実現形として同じ補部構造をもっている場合でも、その取りうる補部構造の集合が同じになるとは限らない。このような理由から、以下では補部構造の集合に基づいてサブ・ミーニングを区別するという方法を採用。

同一の意味的項をもつ動詞の用法がもつ補部構造の集合という点から、動詞「さす」は下記の表1のように区別される。表中の x, y, z は、それぞれ動作主、移動物、着点を表す。（OK）という表示は、表面的な形式としては許容されるが、その場合には項が何らかの理由で省略されていると解釈されることを示す。「彼はサボテンにさした」という文は、たとえば「ドン・キホーテはその槍をどこにさしたのですか」という質問に対する答えとして用いることが出来るが、その場合「槍を」という移動物は文脈上の理由により省略されていると解釈される。その文では表されている出来事に移動物が含まれることが必然的に意味

表 1

	意味 1	意味 2	意味 3	意味 4	意味 5	意味 6
1. x が z に y をさす	OK	OK	*	*	*	*
2. x が y で z をさす	OK	*	*	*	OK	*
3. x が z をさす	OK	*	*	*	OK	*
4. x が y をさす	OK	OK	*	*	*	*
5. x が z にさす	(OK)	(OK)	*	*	*	*
6. y が z にさす	*	*	OK	OK	*	*
7. y が z をさす	OK	*	*	*	OK	*
10. y がさす	*	*	(OK)	(OK)	(OK)	OK

され、それ以外の解釈をすることはできない。つまり、(OK) というのは、そのような潜在的な項が含まれていると解釈されるときに限り容認可能であることを示すものである。

表 1 からわかることの一つに、動詞「とる」は動作主的な意味と非動作主的な意味に分かれる、ということがある。このことは、意味 1, 意味 2, および意味 5 は動作主を含む補部構造をもつことができるのに対し、それ以外の意味 3, 4 ならびに意味 6 は動作主を補部としてもつことができないことから明らかである。また、区別されているサブ・ミーニングが共通の補部構造をもっている場合がある。たとえば、意味 1 と意味 2 は「x が z に y を」という補部構造を共有している。また、意味 3 と意味 4 は「y が z に」という補部構造を共有している。このことは、意味 1 と意味 2, 意味 3 と意味 4 との間にそれぞれ意味的な類似性があることを示していると考えられる。したがって、この動詞の多義的な意味構造を分析するときに、意味 1 から意味 6 までのサブ・ミーニングの区別とあわせて、このようなサブ・ミーニング間の意味的な共通性を明らかにすることが望ましい。

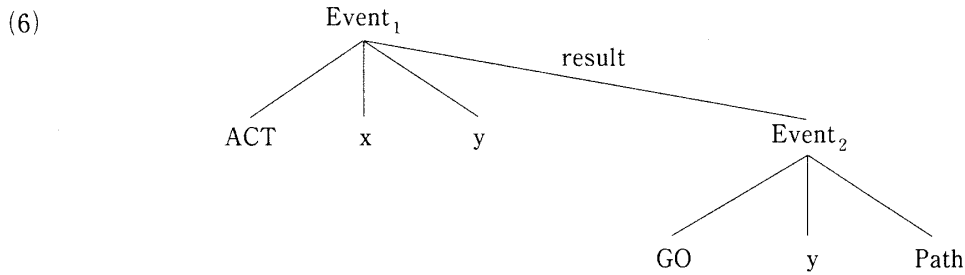
### 3. サブ・ミーニングの意味分析

#### 3.1. 意味 1

最初に上で意味 1 と呼んだ「さす」の意味から考察を始めよう。その例を次に示す。

(5) ドン・キホーテ (x) が槍 (y) をサボテン (z) にさした。

この意味での「さす」は動作主 x を項として取り、その動作主が移動物 y を着点 z に移動させる、という使役移動を表す。使役移動の一般的な意味構造のスキーマは、次のように表すことができる。



(6) に表示されている二つの Event のうち使役的行為を表す Event<sub>1</sub> については、意味 1 では非常に一般的にのみ指定されており、それがどのような行為であるかについての特定のな特徴に関しては未指定のままである。たとえば、使役移動を表す動詞は使役的行為に開始時使役と継続使役とを区別する (Jackendoff 1990, 松本 1997)。開始時使役とは、使役行為者が移動物と共に移動せず、移動の使役は移動が始まる時点でのみ行われることを言う。継続使役とは、使役行為者が移動物と共に移動し、移動に伴って使役を継続して行うことを指す。したがって、「投げる」や「放つ」などは開始時使役を表し、「押す」や「運ぶ」などは継続使役を表す。ところが、これらの動詞がいずれかのタイプの使役行為を表すのに対し、「さす」はその区別については中立的である。このことは使役行為を付加詞として明示した次のような例から分かる。

(7) 棒を {投げて/蹴って/押して}, 斜面にさした。

このように、明示された使役行為が開始時的なもの (投げる, 蹴る) でも継続的なもの (押す) でも、「さす」を用いることができる。このように、意味 1 での「さす」は使役移動を表すが、その使役行為は非常に一般的にしか指定されていない。

それに対し、被使役的出来事である移動物の移動についてはさまざまな特定のな特徴が指定されている<sup>(3)</sup>。まず、柴田ら (1979: 223) が指摘しているように、移動の着点が基準物 (Ground) 内部でなければならない。つまり、移動物の先端部分が三次元的な基準物の内部に入らなければならない (図 1 に示す)、移動物が基準物の表面に接触するだけ (図 2 に示す) ではさしたことになる。

さらに、柴田らは、次の例をあげて、移動物の動きはまっすぐでなければならないと指摘している。

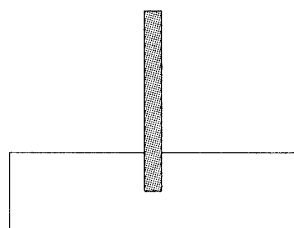


図 1

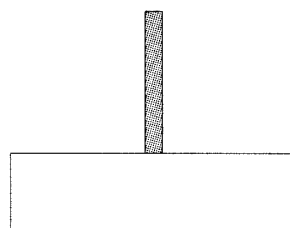


図 2

(8) {一気に／勢いよく／まっすぐ／ゆっくりと／じわじわと／\*くねくねと} さす。

興味深いのは、(8) にあげられた行為の様態を表す副詞は「さす」の意味に含まれる使役的行為 ((6) の Event<sub>1</sub>) を修飾しているとする読みはできないことである。たとえば、「\*くねくねとさす」と言う場合、「くねくねと」は移動物の動きについて描写していると解釈されるのであって、使役行為の様態を表しているとは解釈されない。すなわち、「くねくねとさす」という表現を行為者が体をくねらせながら (まっすぐに) 何かをさすと解釈することはできない。

〈移動の軌跡は直線的である〉という意味特徴の存在は「さす」が表す出来事が移動を含むことを必ずしも意味するものではない。その条件は移動が含まれる場合についてのみ有効になる特徴と考えることもできるからである。しかし、実際には「さす」は物体 (の一部) が他の物体の中に入ることに至る前の物体の移動を意味している。すなわち、物体の移動は「さす」の意味 1 には必要条件である。このことは、次の例から明らかになる。

- (9) a. \* 工事現場の作業員はドリルで道路をさした。  
 b. \* 太郎はかなづちで叩いて、釘を柱にさした。

(9) a は、非常に力持ちの作業員がドリルを持ち上げて、それを上から落して道路に突き刺したという状況を指してであれば用いることができる。しかし、普通にドリルを使うように道路の上にドリルを立てて、動力により道路に穴を開けていくという状況に対して (9) a を用いることはできない。この違いは、後者の場合ではドリルが道路に接触する前に移動を伴っていないためであると考えれば説明することができる。(9) b が不適格と判断されるのも、同様の理由による。

被使役的出来事である移動の意味特徴として他に移動物の形状に関するものがある。「さす」の移動物は一次元的な延長を持つ (つまり、比較的細長い) ものでなければならない。次の例を考えてみよう。

- (10) a. 太郎は扇子を投げて、砂山にさした。  
 b. ??太郎は小銭を投げて、砂山にさした。  
 c. 彼はペンをジャケットのポケットにさした。  
 d. ??彼はハンカチをジーンズのポケットにさした。

(10) a と (10) b とを比較すると、(10) b の容認可能性はより低いと判断される。これは移動物である小銭が一次元的な延長をもつと認識することが難しいことによる。同様のことは (10) c と (10) d との対比からも理解できる。ペンは一次元的な延長をもつことがはっきり認識できるものであるが、ハンカチはむしろ二次元的な広がりをもつ物体として認識される。(10) d の容認可能性が低いと判断されるのは、このためである。しかし、ハンカチは折りたたみ方によっては細長くすることもできる。たとえば、背広のポケットに飾りとしてハンカチを入れておく場合しばしば細長く畳んでおくことがある。そのような時には、「ハンカチを背広のポケットにさす」と表現するのは可能である。類似したことは (10) a についても言える。扇子は閉じたり、開いたりすることができるが、一次元的な延長が最も明確になるのは閉じている時である。したがって、(10) a の文を聞いた場合、典型的に想起されるのは太郎が閉じている扇子を投げたというイメージであろう<sup>(4)</sup>。

次に、移動物がどの程度基準物の内部に入ることが必要かという点について考える。すでに述べたように、「さす」は〈移動物が基準物の内部に入る〉という意味特徴をもつ。しかし、移動物の全体（あるいは大部分）が基準物の内部に入る必要はなく、（一次元的な延長をもつ）移動物の先端が内部に入るだけで「さす」と言うのに十分である（例えば、「蜂が針で肩をさした」）。注意しなければならないのは、この特徴は、移動物の大部分あるいは全体が基準物の中に入る場合には「さす」が使えないというものではない。このことは、「地面に杭を深くさす」という表現が可能であることから明らかである。しかし、「さす」という表現を適用するには、移動物の先端が基準物の内部に入るだけで十分である。上記の「地面に杭を深くさす」ではこの条件は余剰に満たされているのであって、破られているのではない。興味深いのは、この条件は行為の結果状態を示すテイル形においてより明確になることである。

(11) 太郎はボールペンをポケットにさしている。

この文では、ボールペンの全体がポケットの内部に入っていないといけない。その場合は、「ボールペンをポケットに入れている」などのような表現をしなければならない。(11) を用いることができるのは、ボールペン的一部分がポケットの内部に収められている場合に限られる。これらの理由から、〈移動物の先端が基準物の内部に入る〉という意味特徴を「さす」の意味 1 に認めてもよいだろう。

すでに、移動の基準物は三次元的であるという特徴については述べたが、それはさらに固体でなければならないという特徴も「さす」の意味 1 にはあるように見える場合がある。次

の例を見てみよう。

- (12) a. ??女の子がストローでジュースをさした。  
 b. ??漁師が銚で海をさした。

これらの例が示すように、移動の基準物（上の例ではジュース、海）が液体から構成されるときには、「さす」は用いにくくなる。しかし、この条件は「xがyでzを」という補部構造に特定のなもので、補部構造を変えると働かなくなる。

- (13) a. 女の子がストローをジュースにさした。  
 b. 漁師が銚を海にさした。

この事実は、補部構造が違えば意味が異なるという前節で述べたことを裏付けている。しかし、そのことは補部構造の集合によってサブ・ミーニングを区別するという分析方法に対する問題になる。つまり、それは、そのように区別されたサブ・ミーニングの内部でも特定の補部構造ごとに意味が異なるということがあることを示している。注意しなければならないのは、この事実は補部構造の集合による意味の区別ということと矛盾するものではないことである。補部構造の集合によりサブ・ミーニングを区別することは、区別されたサブ・ミーニングどうしが意味的に同一ではないという意味的相違を示すと理解されているのであって、そのように区別されたサブ・ミーニングが意味的に一様であるとは考えられていないからである。したがって、一つのサブ・ミーニングが別の観点から見たときにさらに下位分類されるという可能性は常に残っている。したがって、語の多義的意味を完全に記述するためには、補部構造の集合に基づいて分けられたサブ・ミーニングを明らかにするだけでなく、各サブ・ミーニングでの補部構造ごとの意味の違いも解明する必要がある。しかしながら、以下ではそのような具体的分析は部分的にしか扱わず、意味1から意味6として立てたサブ・ミーニングの記述に限定することにする。

では、補部として「xがzにyを」をとる場合と「xがyでzを」をとる場合と「とる」の意味にどのような違いがあるだろうか。このことを考えるために、まず次の例文を見てみよう。

- (14) a. 太郎は串をちくわの穴にさした。  
 b. ??太郎は串でちくわの穴をさした。

- c. 女の子がストローをコップにさした。
- d. \*女の子がストローでコップをさした。

(14) の例は、「xがyでzを」型の補部をとる場合には、基準物であるzは空洞であってはいけないという制約があることを示している。これは、この型の補部形式では基準物は移動物の先端がその中に入ることによって穴を開けられなければならない、もともとあいている穴に移動物の先端が入ったという場合をさしてそれを用いることはできない、ということを示すものと考えられる。つまり、「xがzにyを」型の補部ではzは単なる移動の基準物でもよいが、「xがyでzを」型の補部ではzはyの移動により影響を受けると解釈されなければならない。つまり、前者ではzは単に移動の基準物であるのに対し、後者ではzは被動作主という意味も担っている<sup>(5)</sup>。また、上の分析で影響という概念を用い、zに穴があくことと特定の指定をしなかったのは、zに空隙が開けられたと理解できる場合でも「xがyでzを」という補部が不適格になる場合があるからである。

- (15) a. 彼女は髪に一輪の花をさした。
- b. \*彼女は一輪の花で髪をさした。
- c. 次郎は苗木を荒れ果てた地面にさした。
- d. \*次郎は苗木で荒れ果てた地面をさした。

(15) b では一輪の花をさすことで髪に空隙があげられると解釈できるし、また (15) d では苗木を地面にさすことで地面に穴があげられると解釈できる。それにも、かかわらずそれらの文が容認不可能と判断されるのは、いずれの場合もzがその構成が破壊されたと理解されるような変化を被っていないためである。一輪の花は髪を飾るためにつけるものであるし、それがささることにより髪の構成がもとの状態から破壊されたとはいえない。同様に、植物は土地に根をはって生きるものであって、苗木が植えられることにより地面の構成が破壊されたとはいえない。このように、zが受けると理解される影響は単に空隙を開けるというような物理的な記述で十分ではなく、zやyで表されているものに関する一般的な知識にもとづいて理解されるものであるように思われる。語の意味としては、〈zのもとの構成が破壊される〉と記述すれば十分であるかもしれないが、その解釈は言語外の一般的知識と連動して決められる。

以上の考察から、意味1は次のように記述することができる。



- (16) さす 1：一次元的な延長をもつ物体を直線的に移動させてその先端部を固体の対象物の内部に入れ（、対象物の構成を破壊す）る。

### 3.2. 意味 2

次に意味 2 について考えてみよう。上記の表 1 が示すように、この意味での「さす」は「x が y で z を」という補部構造をもつことはなく、専ら「x が z に y を」型の補部構造を伴って生起する。

- (17) a. 太郎は鍋の煮物に醤油をさした。  
 b. \* 太郎は鍋の煮物を醤油でさした。  
 c. 彼は右眼に目薬をさした。  
 d. \* 彼は目薬で右眼をさした。  
 e. 整備工はエンジンに油をさした。  
 f. \* 整備工は油でエンジンをさした。

この対比は、意味 2 の「さす」が y を z のなかに入れることにより z が破壊されると解釈することが出来ないような状況を指して用いられることによると説明することができる。

(17) の例からわかるように、この意味での「さす」の移動物は液体でなければならない<sup>(6)</sup>。さらに、移動物である液体は一次元的な延長をもつ形状をとって移動しなければならない。このことは、次の例からわかる。

- (18) a. 彼は筆で器に絵の具を {さしている／塗っている}  
 b. \* 彼は刷毛で壁にペンキを {\* さしている／塗っている}。  
 c. 太郎は鍋にみりんを {さした／加えた}。  
 d. \* 太郎は鍋に鰹節を {\* さした／加えた}。

(18) a と (18) b を比較すると、(18) a では「さす」も「塗る」も共に用いることができるのに対し、(18) b では「塗る」だけが可能で、「さす」は不適格になる。これは筆や刷毛に付けられた絵の具やペンキは筆先や刷毛の先と同じ形状をとることと関係があると考えられる。筆先は縦に長く一次元的な延長を認めることができるのに対して、刷毛の先は横長で一次元的な延長を主要な軸と認識することはできない。〈一次元的な延長を（主要な軸として）もつ〉という特徴が重要であるということは、(18) c, d の対比からも支持される。みりんを鍋に入

れるとき、ふつう鍋に注がれるみりんは筋状の形をして鍋のなかに移る。それに対し、鰹節を鍋に加えるときには鰹節が筋状に鍋の中に移動させられることはない。したがって、先の特徴を認めれば、(18)cで「さす」の使用が容認可能となるのに対し、(18)dではそれが許されないという事実を説明することができる。

さらに、意味2には興味深い意味特徴を認めることができる。それは〈移動物である液体は少量である〉というものである。直観的にも、意味2の「さす」は目薬や油や調味料や絵の具のごく少量の液体を物体の中に入れるという意味特徴が関与していることを認めることができる(少なくとも筆者には)できる。このことは、また、(19)の例からも見て取ることができる。

(19) 用務員さんはホースでバケツに水をいっぱい { \*さした / 注いだ }。

上の例で、移動物である水は液体であり、移動の際の形状は筋状で一次元的な延長をもっていると認めることができるにもかかわらず、「さす」を用いることはできない。(19)が表している状況と(17)a, c, eが表している状況との違いは、前者では移動物である水が多量であるのに対し、後者ではそれがごく少量であると解釈できるということである。

これまで考察してきたことから、「さす」の意味2を次のように記述する。

(20) さす2：少量の液体を筋状に対象物の内部に移す。

上の定義が示すように、意味2は専ら移動に関する情報を定めるものであって、対象物を破壊するという意味1にあった特徴は見られない。このような分析は、意味2の「さす」が「xがyでzを」型の補部構造をもつことができないという事実に基づいている。このように特定の補部構造を伴って生起する場合の動詞の意味的な特徴が分かれば、その補部構造と共起するか否かという事実にもとづいてサブ・ミーニングの意味をどのように特徴づけるかが決められる。これは、補部構造に基づいて動詞の意味を区別する方法のもつ意味分析に関する利点と考えることができるだろう。

### 3.3. 意味3

意味3と後で扱う意味4の「さす」はこれまで考察した二つのサブ・ミーニングと異なり、非動作主的な出来事を表す。したがって、主語として生起するのはこれまでのように動作主ではなく、移動物である。意味3の場合、移動物になるのは光線あるいは影である。こ

のため、対象物  $z$  の内部色調が変化することが含意される。

- (21) a. 明るい朝日が部屋の中にさした。  
 b. 薄暗い影が部屋の中にさした。

次の例が示すように、移動物がそれ以外の場合、文は不適格になる。

- (22) a. \* 涼しい風が部屋の中にさした。  
 b. \* 桜の花びらが部屋の中にさした。

これらの文が不適格になるのは、移動物の形状に関連があると考えられる。(21) の文のように移動物が光線や影の場合は、移動物は筋状の形（光の筋）をもつ一次元的な延長物である。しかし、(22) にあるような風や花びらは一次元的な延長をもつものではない。

意味3に見られる特徴のもう一つは、 $z$  の三次元性である。着点を表す  $z$  は、三次元的な広がりをもった空間（あるいは、そのような空間を含意するもの）でなければならない。したがって、 $z$  は以下の例のような二次元的な広がりをもつ空間の表面を意味するものではない。

- (23) ? 真夏の太陽光線が [砂漠/海面] にさした。

しかし、二次元的な空間の表面であっても、三次元的な空間の内部を喚起する場合は「さす」を用いることができる。

- (24) 真夏の太陽光線が絨毯の上にさした。

絨毯は部屋の中に敷かれているのが普通であるため、(24) は太陽光線が部屋の中に進入したことを含意する。この文が容認されるのは、そのような解釈を自然に得られるためである。また、三次元的な物体であっても内部への光線や影の進入を許さない物体も  $z$  として用いることはできない。

- (24) ? 真夏の太陽光線が [ピラミッド/大仏/コンピューター] にさした。

また、意味3では移動物の先端が基準物の内部に入るという特徴をもっていると考えることができる。光は光源から、影は影を作り出している物体から延びて基準物の内部に達するのであるから、基準物の中に進入しているのはその光あるいは影の先端部分のみということになる。このことは、次の例が表す状況を考えるとより明確に理解できるだろう。

(25) 一筋の光が部屋の中にさした。

また、〈移動物の先端部分だけが基準物の内部に進入する〉という条件は、雨や吹雪が空間内部に進入することを指して「さす」が用いられないという事実を説明できる。

(26) \*激しい〔雨／吹雪〕が部屋の中にさした。

雨や雪の場合は移動するのは雨粒、雪片であり、それらは全体として部屋の中に進入することになる。このため上記の条件を満たさないため、「さす」を用いることができない。

したがって、意味3は次のように記述することができる。

(27) さす3：光線の先端部分が三次元的空間内部に進入する。そして、その光の反射により、空間内部の色調が変化する。

#### 3.4. 意味4

意味4も意味3と同様、非動作主的な出来事に関わるものである。また、この意味での「さす」は、意味3の「さす」と並び「yがzに」という補部形式（のみ）を取る。以下に例を示す。

(28) a. その子供の頬に赤みがさした。

b. 蒼味のさした常の頬（『日本国語大辞典』「さす（差・指・射）」自動詞5，夏目漱石『行人』）

意味4と意味3との関連は明らかであり、それらはzの色調の変化が表現されていることである。また、意味4の「さす」はごく薄い色調の変化を表しており、はっきりとした色がつくことを指して使われることはない。

- (29) a. \* その子供の頬全体に真っ赤な色がさした。  
 b. \* その患者の顔全体に真っ青な色がさした。

y が表す意味的項を（比喩的な意味での）移動物と考えるとすると、このことは移動物のごく少量だけ基準物に現れたことを意味すると捉えることができる。それが正しいとすると、意味4 は意味3 だけでなく意味2 とも意味特徴を共有することになる。

以上のことから、意味4 は次のように記述される。

- (30) さす4：身体部位の色調がごくわずか変化する。

### 3.5. 意味5

意味5 の「さす」は物体をある方向に向ける、あるいは、物体がある方向を向くことを表す。以下に例をあげる。

- (31) a. 博士がペンで二番目の数式をさした。  
 b. \* 博士がペンで二番目の数式にさした。

上の例が示すように、この意味での「さす」は「x が y を z に」型の補部をとることができない。その理由は、おそらくこの意味の「さす」は y により表される物体の移動を意味していないためであると思われる。意味5 では単に y がある方向に向けられる（あるいはある方向を向く）ことが意味されるだけであって、y が z までの位置の変化を起こすことが意味されているのではない。したがって、(31) a では博士はペンを数式が書いてある位置まで動かす必要はない。単に、ペンの先を数式の方角に向けるだけでもよい。つまり、その文での「さす」が意味しているのは、移動ではなく特定の方向に物体を向けることである。ただし、ここで移動がないと述べているのは、補部 y の移動に関することであって、まったく移動の意味合いが消えてしまっていると言っているのではない。たとえば、(31) a の場合、ペンの先端から数式までの空間を注意の焦点が移動するという主観的な移動が想定されていると考えることができるだろう。

このように意味5 の「さす」は y が表す物体が移動するという意味を失っているが、y が一次元的な延長をもつという特徴は消えてはいないようである。

- (32) a. この矢印は山小屋をさしている。

b. 上野の西郷隆盛像は西を |\*さしていますか/向いていますか|。

上の例にあるように y として表現される物体は一次元的な延長を持っていない。③2 a の「矢印」は一次元的な延長物であり、その先端が z の方向を向いていると解釈されるが、③2 b の「西郷隆盛像」は一次元的な延長物であるとは捉えられない。したがって、意味 5 は〈y が一次元的延長をもつ〉という特徴を持っており、他のサブ・ミーニングとの意味的関連を完全に失ってしまっている（つまり、この意味での「さす」と他の意味での「さす」は同音異義である）わけではない。

最後に意味 5 の定義を以下に示す。

(3) さす 5：一次元的な延長をもつ物体の先端部を対象物の方向に向ける。

### 3.6. 意味 6

最後に意味 6 について考える。この意味での「さす」は一項述語であり、補部として y のみをもつ。したがって、他のサブ・ミーニングでは可能である補部もこの意味での「さす」では生起することはできない。

- (34) a. \*急に私が嫌気を自分にさした。  
 b. \*急に私が嫌気で自分をさした。  
 c. \*急に私が嫌気 |を/で| さした。  
 d. \*急に嫌気が私 |に/を| さした。  
 e. 急に嫌気がさした。

このように、補部構造の点から見ると意味 6 は他のサブ・ミーニングとの関連がまったく見づかりそうにないように思われる。しかし、意味 6 も他のサブ・ミーニングと意味的な類似性を有しており、その意味でこれまで見てきた「さす」の多義的な意味構造の一員として考えることができる。そのことを確かめるために次の例を考えてみよう。

- (35) a. |すこし/いささか/わずかに/ちょっと| 嫌気がさした。  
 b. \*|すごく/たいへん/非常に/かなり| 嫌気がさした。  
 c. |すこし/いささか/わずかに/ちょっと| 眠気がさした。  
 d. \*|すこし/いささか/わずかに/ちょっと| 眠気がさした。

上の例は、「yがさした」という表現は特定の意味の程度副詞としか共起しないことを示している。(35) a, cにあるように、その表現と共起できる程度副詞とは、ごく小さな程度を意味する程度副詞である。逆に、(35) b, dが示しているように、大きな程度を意味する程度副詞は「yがさす」という表現とは共起しない。この程度副詞との共起制限が「さす」という動詞に特徴的であることは、意味的に類似した他の表現と比較してみるとよりはっきり分かる。

- (36) a. |すこし/いささか/わずかに/ちょっと| 嫌になった。  
 b. |すごく/たいへん/非常に/かなり| 嫌になった。  
 c. |すこし/いささか/わずかに/ちょっと| 眠くなった。  
 d. |すごく/たいへん/非常に/かなり| 眠くなった。

これらの例が示すように、「嫌気がさす」、「眠気がさす」と意味的に類似している「嫌になる」、「眠くなる」という表現には(35)に見られたような程度副詞との共起制限は見られない。これらの考察から、意味6の「さす」は〈yが少量である〉という意味特徴をもっていることが分かる。つまり、意味6において「さす」と表されているのはyのごく一部、すなわち、わずかの量のyということになる。このように、意味6は意味1, 意味2, 意味3, 意味4とこの意味特徴を共有しているのである。したがって、意味6も他のサブ・ミーニングと共に「さす」の多義的な意味を構成する一つとして認めることができる。

以上の考察にもとづいて意味6を次のように定義する。

- (37) さす6：意図せずわずかな程度否定的な感情，感覚になる。

#### 4. 結 論

これまでの分析をまとめると、動詞「さす」は次のような六つのサブ・ミーニングをもつ多義的構造を成している。

さす1：一次元的な延長をもつ物体を直線的に移動させてその先端部を固体の対象物の内部に入れ（対象物の構成を破壊す）る。

さす2：少量の液体を筋状に対象物の内部に移す。

さす3：光線の先端部分が三次元的空間内部に進入する。そして、その光の反射により、空

間内部の色調が変化する。

さす4：身体部位の色調がごくわずか変化する。

さす5：一次的な延長をもつ物体の先端部を対象物の方向に向ける。

さす6：意図せずわずかの程度否定的な感情，感覚になる。

この定義が示すように，補部構造の集合にもとづき区別される用法には実際に異なる意味内容が認められる。このことは補部構造の区別にもとづく多義語の分析法が有効であることの一つの証左となるだろう。

これらのサブ・ミーニングは多元的に他のサブ・ミーニングと意味的関連をもち，複雑な意味のネットワークを構成している。この多義的な意味関連を以下の表に明示する。その表はそれぞれのサブ・ミーニングの規定に重要な役割を果たしている意味特徴がどのサブ・ミーニングにより共有されているかを表している。それを見ると，多義性を作り出しているサブ・ミーニング間の意味関連は多面的であって，一本の直線上に並べられるものではなく，いくつかの異なる意味特徴が異なるサブ・ミーニングによって共有されていることがわかる。(Lakoff 1987)

表 2

	意味 1	意味 2	意味 3	意味 4	意味 5	意味 6
y の一次元性	+	+	+	-	+	-
z の三次元性	+	-	+	-	-	
y の固体性	+	+	-	-	+	-
z の被影響性	+	-	+	-	+	
z の固体性	+	-	+	+	-	
移動の抽象性	-	-	+	+	+	+
z の色調の変化	-	-	+	+	-	-
y の少量性	+	+	+	+	-	+

注

- (1) この論文は1995年に上智大学大学院で開講されていた「日本語構造論Ⅰ」で行った発表に基づいている。その場において有益な意見を与えて下さった渡辺実先生ならびに受講者の方々に感謝したい。特に，この論文で示した多義語の意味分析の方法論に関しては渡辺実先生の示唆に負う部分がいくつかある。なお，本論で示した考えは結果的には与えられた意見のすべてに應えるものではなく，また，誤りがあるとすればすべて筆者に帰されるべきである。
- (2) この文は，「目薬」がメトニミーにより目薬の容器を意味していると解釈すれば，容認可能となる。しかし，その場合，例(3)とは表わされている意味が変わる。
- (3) 松本(1997)は英語には使役の手段を表す使役移動動詞が多いのに対し，日本語には経路位置関係を表す使役移動動詞多いという傾向を指摘している。使役の手段を表す動詞は使役行為の特徴を動詞によ



- り表現し分けることを意味し、経路位置関係を表す使役移動動詞は被使役的出来事である移動の経路についての特徴を動詞により表現し分けることを意味する。「さす」が被使役的行為の特定のな特徴を表すということは、この日本語の使役移動動詞の一般的傾向と合致していると考えられる。
- (4) 〈一次元的な延長をもつ〉という特徴は程度差を内包する典型的条件と考えられる (Jackendoff 1983, Lakoff 1987)。たとえば、ハンカチを折り畳んだときの縦と横の長さの比率によって一次元的な延長をもつと認められる程度は漸進的に異なると思われる。
- (5) この分析は、後者の補部構造において *z* が対格 (ヲ格) で標示されているということからも支持される。日本語においてヲ格は典型的に被動作主を標示するのに用いられるからである (Kuno 1973, 角田 1991)。
- (6) この特徴に例外として「彼女は青白い唇に口紅をさす」という表現をあげることができる。ただし、これはかつて液体であった紅を唇に塗ることを「紅をさす」と表現していたことのアナロジーと考えることができるため、完全な例外とは言えない。

#### 参考文献

- 國廣哲彌 1982.『意味論の方法』 東京 大修館書店
- 柴田武, 國廣哲彌, 長島善郎, 山田進, 浅野百合子 1979.『ことばの意味2: 辞書に書いてないこと』 東京 平凡社
- 高見健一 1995.『機能的構文論による日英語比較: 受身文, 後置文の分析』 東京 くろしお出版
- 角田太作 1991.『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』 東京 くろしお出版
- 松本曜 1997.『空間移動の言語表現とその拡張』 田中茂範, 松本曜著『空間と移動の表現』 東京 研究社
- 渡辺 実 1996.『日本語概説』 東京 岩波書店
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The cognitive organization of information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Davis, Anthony R. and Jean-Pierre Koenig. 2000. Linking as constraints on word classes in a hierarchical lexicon. *Language* 76: 56-91.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and Cognition*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1992. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford, CA.: Stanford University Press.
- Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A preliminary investigation*. Chicag: The University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: The syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Matsumoto, Yo. 2000. Causative alternation in English and Japanese: A closer look. *English Linguistics* 17, 160-192.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and Cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: Sematnic structure in lexical forms. In *Language Typology and Syntactic Description*, vol. 3: *Grammatical Categories and the Lexicon*, ed by Timothy Shopen. Cambridge: Cambridge University Press.
- Van Valin, Jr., Robert D. 1993. A Synopsis of Role and Reference Grammer. In *Advanced in Role and Reference Grammer*, ed. by Robert D. Van Valin, Jr. Amsterdam: John Benjamins.